

P-8-71

文献複写サービスにおける日赤図書室協議会の取り組み

京都第二赤十字病院 図書室¹⁾、沖縄赤十字病院 図書室²⁾

○川野 眞樹¹⁾、久高 千秋²⁾

【はじめに】文献複写サービスとは図書館(室)間で行われる文献の相互利用のことである。利用者が所属図書館に必要とする文献がない場合、図書館担当者が他図書館に依頼し、実費負担で文献を入手するサービスである。日赤図書室協議会(協議会)は設立時より、職員が診療や業務で必要とする医学情報(文献)を入手できるよう各会員施設の新蔵雑誌の目録を統合したデータベースを作成し、施設間で文献複写サービスが円滑に行われるよう活動してきた。【協議会の取り組み】協議会では文献複写サービスを施設毎の価格設定で行っていたが、支払い業務の簡素化や日赤間での文献の有効活用を目的とした文献提供無償化の要望、2011年の東日本大震災で被災施設援助への文献の無償提供を行った経緯もあり、いつでも素早く必要な医学情報を提供できるよう、2013年に無償化文献複写サービスを任意参加で始めた。会員施設全体の文献入手において日赤間の入手率は無償化前の2011年度で25%だったが、2017年度には47%に増加した。参加施設数も開始時の49から54に増えた。【課題】無償化で日赤間の文献の有効活用は図れたが、文献依頼が一部施設に集中する等、施設間での不均衡が出ていて、担当者の異動時に業務の引継ぎが不完全な施設もあり、文献複写サービスに必要なデータベース構築のための雑誌目録の提供が一部滞る等、文献複写サービスを円滑に行うためのシステムやデータベースに不備が見られる。【今後】協議会では円滑な医学情報の有効活用を目指し、共有マニュアルの整備だけでなく、研修会で担当者の知識向上を図る等、日赤のグループメリットを活かした医学情報提供の環境整備に努めたい。

P-8-73

業績集としての「赤十字リポジトリ」活用

静岡赤十字病院 図書室

○天野 いづみ

【背景】2012年6月に日本赤十字社が国立情報学研究所のJAIROCloudシステムを用いて構築した「赤十字リポジトリ」を利用し、2015年4月より産婦人科医師の論文、学会発表、講演記録を集積した。医師は、転勤が多く、自身の業績を把握することが難しいが、リポジトリに登録することでJAIRO(学術機関リポジトリポータル)にて横断検索が可能となり、世界の何処でも自身の業績が確認可能である。日本でのリポジトリ構築は786機関である(2019.3現在)。【方法】2015年4月に産婦人科担当の医療秘書にリポジトリの概要を説明し打ち合わせを行った。論文は医師がリポジトリ公開の許可を得て、医療秘書が医師から提出された業績をまとめ、PDFと共に提出するよう依頼した。当該科の年間業績の提出スタイルに合わせて、学会発表は、抄録も論文とみなしカウントすることから、学会発表と論文・著書の双方に登録することとなった。【結果】2011～2019.4の期間内の登録は153件、その内、PDFの登録は11件、フリーで公開されているURLのリンク付けは25件、学会会員限定のページのリンクが7件である。PDF登録により利用者は、医中誌Webからフルテキストの閲覧が可能となる。【考察】現在は、医療秘書を介してデータを入手しているが、医師により提出のバラつきがある。開始当初は、医師が学会、出版社へリポジトリ公開の許諾を得ていたが、近年は、データのみでPDFの提出が減り、本来のリポジトリの活用できていない事が、今後の検討事項である。また、学会誌では数年後にオープンアクセスとなる場合があり、該当ページのURLをリポジトリに登録すればリポジトリから利用可能となり、より便利に活用ができるため、定期的なチェックが必要であり課題でもある。

P-8-75

患者図書室の新設 患者さんの学びと癒しの場を目指して

前橋赤十字病院 図書室

○塚越 貴子

【はじめに】2018年6月、新病院に移転後、2ヶ月の準備期間を経て患者図書サービスを開始した。患者図書室は患者さんやご家族に対し、医療情報を提供し、共に治療を考え、同時にリラックスできる癒しの場を提供することを目的としている。開設一年を経て、その利用状況等を分析し報告する。【開設から現況に至るまでの経緯】新規購入した医学図書200冊と職員・患者さんから寄贈された一般書400冊に製薬会社等が作成している健康情報パンフレットを準備した。当初は図書ボランティアが常駐できる月曜日と木曜日の週2日のみ開館していたが、現在は月曜日から金曜日の午前10時から午後3時30分の開館時間に変更している。貸出は未実施であったが、蔵書数の増加に伴い2018年10月から一般図書の入院患者さんへの貸出サービスを開始した。開設前は、病気や治療について学んでいただくことを目的とし、医学図書の収集に力を注いでいたが、手に取る方は少なく、娯楽書を好まれる傾向にあった。しかし患者図書室の認知度が高まるにつれて疾患や治療、予後に関する図書の問い合わせや、司書への医学情報検索の依頼があり、医学図書の貸出を2019年4月から開始した。【利用動向】8ヶ月間の来館者数の合計は、1,248名、月平均は156名であった。貸出は半年で480冊、月平均80冊、貸出利用者は148名であった。【今後の課題】患者さんの治療や予後などに対する悩みや不安の軽減を行い、自らの病気や治療についての正しい知識を理解をしていただけるように学びの場としての強化と医学情報に関する文献検索を常に対応できるように今後の課題である。患者図書室からの積極的な情報発信を実施し、健康情報サービスとして地域図書館との連携、協力を深め、さらなる可能性を追求していきたい。

P-8-72

患者図書室利用促進の工夫について

長野赤十字病院 図書室

○池田 友昭

【目的】平成18年に入院、外来患者向けのサービスとして患者図書室を設置した。公共図書館では充足できない専門書籍にて自身や家族の病気のことを調べて不安を軽減してもらおう。そして入院中や外来待合時間を有意義に過ごしてもらおうことが目的である。そのためには患者図書室サービスの周知が必要である。そこで、平成29年より、利用促進と認知度を高めるための工夫を考え、リピーターを増やすための工夫を行ったので報告する。

【方法】入館しすぐ目に入る書架に新刊、話題作品を追加した。書架の空きスペースに書籍を平置きし表紙を見やすく、手に取りやすくした。書架の奥行き調整のためにティッシュ箱を加工し利用し、取出しやすさを改善した。また、患者向け季刊誌へ患者図書室の紹介記事の掲載、患者図書室内の掲示場所の見直しを行い、不足ジャンルの所蔵を増やした。

【結果】来室者数はH28:2,444名、H29:3,057名、H30:3,117名と増加した。貸出冊数はH28:499冊、H29:1,117冊、H30:948冊。H30年は貸出冊数が前年より減ったことが要因と思われる。利用増加に伴い今まで利用数の少ない書籍も貸出が増えた。

【考察】書籍の面陳列・平置きが増加で書籍自体を認識しやすくなったことや、広報の強化により利用・貸出が増加した。今後の課題としては、部屋が狭いこと、入通りが少ないという立地条件、また予算がなく寄贈に頼っているため蔵書数が少なく、新刊も少ない。そして患者図書室はボランティアの担当であるが欠勤が多く図書担当職員での対応が増え、医学図書室の業務に支障が出ていることがあげられる。今後はこれらの課題点をクリアし、その時の社会変化・ニーズに合った患者図書室を運営していきたいと思う。

P-8-74

日赤図書室協議会におけるホームページの活用と課題

石巻赤十字病院 教育研修課

○羽田 智和子

日赤図書室協議会は、全国62施設からなる赤十字病院図書室のネットワークであり、会員同士の相互協力や研鑽により、図書室の充実と向上に努め、医療事業の発展に貢献することを目的としている。しかし、多くの病院では図書室の管理、運営を司書一名が兼任で行っているため、各施設内において業務上の問題解決や最新情報の取得が困難になっている。そのため、会員間で情報共有やマニュアル等の充実といった、業務に役立つサービスの強化を目的として、2003年に手作りのホームページを開発、2012年には業者に委託してリニューアルした。その内容は1.情報共有の場として「会員コミュニティ」を設け、各施設で生じた問題を会員間でフォローしたり、最新情報の共有を可能とした。2.電子ジャーナルを円滑に運用するための、「電子ジャーナルの統計取得サポート」、「文献検索用マニュアル」等のページを設け問題解決を図った。3.図書室利用者や担当者の文献検索の手間を減らすため、日赤施設の所蔵データをまとめた「日赤医学雑誌総合目録」を本社に提供し、リンクリゾバとして「電子ジャーナル・ブック検索」を本社と共有した。4.東日本大震災時に学術情報が入手しにくかったという教訓をもとに、災害時に各施設や出版社の協力によって、文献をメールで被災地に届ける「災害サポート」ページを設けた。このように、ホームページを活用することで、以前より会員間での協力、情報共有の範囲を広げ担当者の業務を支援することができ、図書室の充実と向上に役立っている。しかし、急速な電子化や情報の変化に各施設単独でも対応できるように、担当者全員が最新情報を収集できる環境整備、また、それを利用するための基礎知識の取得が必須であり、協議会の研修会等と併せてよりニーズに合ったホームページの作成が今後の課題である。